

エッセイ2000

歌のいろいろ

日本文藝家協会編

編集委員 高田宏 津島佑子
三浦哲郎 三木卓 前川康男



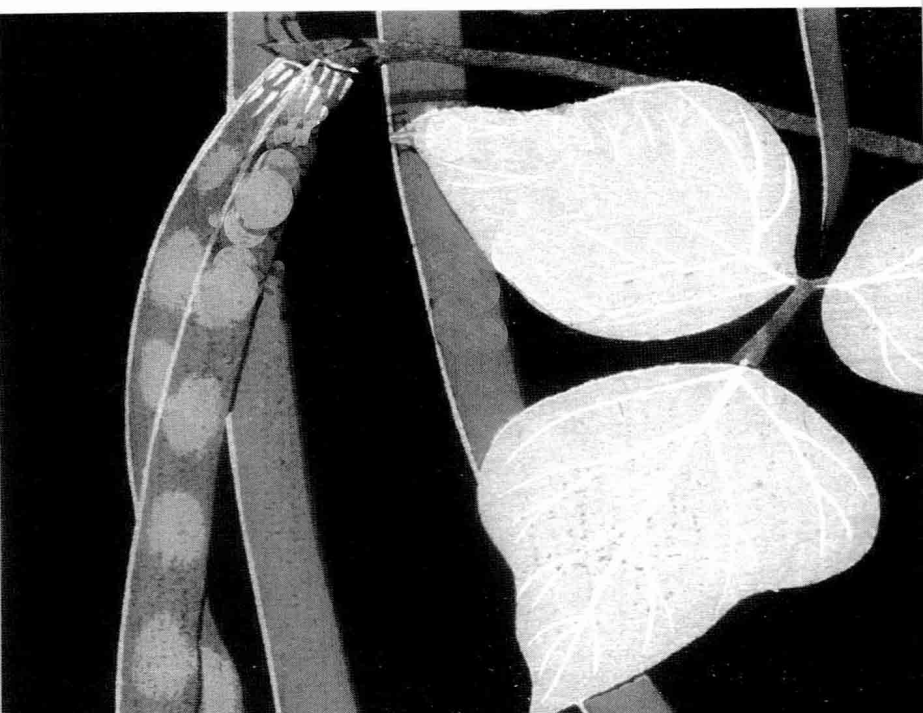
日本文藝家協会編

編纂委員 高田宏 津島佑子
三浦哲郎 三木卓 前川康男

光村図書

エッセイ2000

歌のいろいろ



歌のいろいろ

二〇〇〇年七月二十五日 第一刷発行

編者——日本文藝家協会

発行者——常田 寛

発行所——光村図書出版株式会社

東京都品川区上大崎二一九

郵便番号一四一八六七五

電話〇三三四九三二二一一(代)

印刷所——株式会社加藤文明社

製本所——和田製本工業株式会社

価格はカバー・帯に表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は禁じられています。

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

エッセイ
2000

歌のいろいろ
目次

夜中の納豆

古井由吉 10

眠りの王様

池内紀 18

私が好きな『細雪』

水村美苗 24

『荒城の月』逸聞

長田弘 29

鮎の生きずし

渡辺保 34

町の音

日高敏隆 41

約束の風景

日野啓三 46

「諸君、もう寝ましようか」

堀田百合子 51

最初の人

沢木耕太郎 56

あの声が今日も聞こえる——飲食男女

久世光彦 61

老女ウメー

又吉栄喜 67

山住みの時間——ホトトギスの空

前登志夫 72

無常とカメラ

山崎正和 77

恐怖の「今こそ」

山田詠美
81

リリー・マルレーン

伊藤桂一
88

言い損ない——にほん語観察ノート

井上ひさし
92

惜しい、の一言

四方田犬彦
95

うなぎ茶漬

小林恭二
99

寒がり日記

村田喜代子
103

心臓物語西と東

山折哲雄
108

二月の風

佐藤洋二郎
112

たった一度会った茂吉

岡野弘彦
118

視覚のウラシマ現象——中年よ荒野をめさせ

椎名誠
123

歌のいろいろ

津島佑子
128

親父の小説

西木正明
133

桂枝雀の求道者人生

木津川計
141

猫の墓、人の墓

連詩の試み

触読

骨

ワタシをご存知？

医師の選択

唯一無二のプロレスラー

文筆家の連休について

「たんと」と「tanto」

日本語のこころ

妻より強かった頃

祭り寿司

展墓

瀬戸内寂聴

大岡 信

佐伯一麦

別役 実

小林聡美

長部日出雄

夢枕 獏

三木 卓

河野多恵子

金田一春彦

北 杜 夫

宗 左 近

杉本秀太郎

147

151

156

160

165

169

174

177

182

186

190

195

199

韻文の効用

木田 元

204

コオロギを探して

岸田今日子

209

思え！

辺見 庸

213

名前の由来

木村尚三郎

216

きびしい時代の新人へ

坂上 弘

219

魚拓で躍れ！ たいやきくん

宮嶋康彦

224

君等の乳房

川上弘美

228

遠心力と求心力の格闘——「開高健展」に寄せて

黒井千次

231

ふたりつこ地蔵——表情豊かに子供たち

榊 莫山

235

ふっと思ひ出す話

後藤明生

238

散歩と思ひ出

荒川洋治

243

耳の出血

安岡章太郎

247

フクロウ讃歌

高島俊男

251

老

食パンの耳

ぼくのなかの冬

寄せてはかえすヌーベルバーグ

家族のやわらかい存在

宮廷楽団への困惑

カメラと巨人と犬

叱責の声

狂ひ咲き

往時茫々

富士山を見た

なにを食べても…

境界小説

森 毅

256

岩阪恵子

260

高田 宏

265

山田宏一

269

清水邦夫

274

山下洋輔

279

赤瀬川原平

283

小倉寛子

288

高井有一

292

田辺聖子

297

山田風太郎

305

早坂 暁

309

加藤幸子

314

老年と喧嘩

なだいなだ

319

鎌倉のサロン

中野孝次

323

月下美人花開く

尾崎秀樹

328

「真」を追求した評論家——尾崎秀樹君を悼む

黒岩重吾

332

大工のカミさん

宇江佐真理

336

山村の暮し方

五木寛之

340

いまどきのショーセツカ

久間十義

344

読む

辻 章

349

避けて通れぬきたない話

阿川弘之

354

八〇歳の二〇〇〇年

梅棹忠夫

358

装帧
||
公司

修

エッセイ
2000
歌のいろいろ

夜中の納豆

古井由吉

夜中に納豆を喰う。寝酒の肴である。酒は日本酒の昔ながらのヒヤ、常温である。納豆は今風の小さなパック、あれひとつで、まあ、足りる。葱を刻んだり、玉子の黄身を落としたり、その程度の手間も、もう睡くて、面倒臭い。醤油と辛子だけだ。その醤油も使いが年々、つましくなっていく。納豆はもともと好物なのだが、これを食べていると、なにやら、神経が息^{やす}まる。

さて夜中に一人で納豆を喰いながら、遠い旅へ出ることを思う、とても言うのか。そういうことも、ないではない。しかし近頃ではそれよりもしばしば、一人のドイツ人の男性の姿を思い出す。もう老齢に近い。今から三十年昔のことだ。東京は武蔵野の、当時は郊外よりもさらに外と感じられていた土地にある大学に、私は週に一度朝早くから通っていた。稼ぎのためである。その午前中の十五分ばかりの休みの間に、大学の構内のはずれの

グラウンドを歩いていると、冬場にかかる頃から、かならずその男性と、かならずほとんど同じ所で出会うようになった。同じ散歩でも、私のなどはせかせかしたものだだったが、その男性はいかにも逍遙というような、悠揚迫らぬ、しかも何かに常に耐えるような足取りで近づいて来る。グラウンドの中央あたりで私たちは立ち停まり、私は下手なドイツ語で、彼は長年日本で学生に教えている外国人に特有の、妙に聞き取りやすいドイツ語で、しばらく立ち話を交わす。たいていは、今日は一段と寒いとか、奥多摩の山々が近く見えるとか、その程度のことだったが、ある日のこと、自分は日本に来てもう数十年になり、日本の食べ物にもすっかり馴れたが、あの納豆というものだけは、粘りはともかく、臭い（にお）がどうも、と穏かに笑いながら眉をかすかにひそめた。その顔が、三十年経った今になり、夜中に納豆を喰う私の目に浮かぶようになった。

長年そこで暮らしても、どうにも馴れぬ味や臭いはあるものだ、といまさら感心するものも、まことに月並みなことだ。しかしあのドイツ人の男性は当時、今から思えば、現在の私と同じぐらいの年齢、いや、もうすこし年下だったかもしれない、と数えれば、同じ月並みでも、感慨はもうひとつまさる。たしか、日本二骨ヲ埋メルツモリデイマス、とそんな日本語を口にしていたはずだ。それにひきかえ生涯故国に留まって、老境に近づいて夜中に納豆を喰いながら、そのうちに自分にとって、ひよっとしたら、この喰い物しか口に

合わなくなるのではないか、と妙なことを心配しては呆れている私は、どういふ「運命」にあるのだろうか。

時から逃れんものと世界中を駆け回る者もいれば、揺り籃（故国）に留まりながら時を殺す者もいる、とうたった詩人もいる。

しかし、どんなものか。老境に深く入るまでこのまま故国に留まって夜中に一人で納豆を喰っている、というふうには、かならずしも、行かないのではないか。不帰の旅へ早目に立つということは別にしても。十何年か後にはあるいはどこか遠い異国の町に住みついていて、何を肴にしているか知らないが寝酒を嘗めながら、あの納豆というものは、味を忘れたわけではないが、日本人の多い街まで行けば手に入らぬでもないが、しかしあれを昔、どんな気持で、夜中に一人で喰っていたのだろう、とふつと首をかしげるといふことも、あるかもしれない。

高校の同窓生に一人、停年の直前に東京の家をすっかり畳んで、家族ともどもアメリカの東海岸の街へ引き移ったのがある。やむを得ぬ事情のあつてのことで、唯一残された道としてそれを選ぶまでにはさまざま心も乱れたことだろうが、最後の同窓会に現われた時には、「会の通知は送ってください」と、さっぱりとした顔で言っていた。かと思えばも

う一人の同窓生は今からもう四十年ほど昔に、おそらく遊学のつもりで渡ったのだろうが、北ドイツの街で邦人たちに日本からの日用品を届けるというアルバイトをするうちに、輸出入を扱う商会の主人となり、今日に至っている。同窓会に、人は来られなかったが、ワインが一ダース届いたこともある。この二人の同窓生の移住には四十年ほどの時差があるわけだが、あるいはそれぞれに、いよいよ旅に立ったのがつい昨日のことだったように思われる夜があるのではないか。

旅と言えば、われわれ日本人の頭からは、とかく移住ということが抜け落ちるが、古今東西、人の旅の半数を占めるのは、移住ではなかったか。たしかに、諸外国に比べれば、流出入のすくないほうの国ではあっただろう。ここ半世紀あまり観念の「国際化」は進んだが、気質のほうはさらに内弁慶になった気味もある。海外での生活を幾度も重ねた末に、日本ではあまり良い老後も見えないけれど、やっぱり外国では、心はともあれ胃袋が、暮らせない、と思いつける高年者も多いのだろう。外国に来てまず日本食を求める若い者たちもすくなくないとか聞く。日本食とは、ラーメンのようなものだという。

しかしまたその一方ではわれわれにとつて、生活の伝統習慣の重しが、だいぶ、利かなくなっている。根無しとまでは言わず、根が浅くなっている。ということは、これを水草に喩えれば、浮き草となつて流れ出す、その兆候かもしれない。国際化を叫ぶ人は多いが、

流出の時代を思う人はすくない。悪い事情が加われば、流亡にもなる。

身は習^なわしものと言われるが、生活習慣というものは堅固なようで、あんがい、はかないものだという意味にもなる。通りすがりの異国の町にあって、自分はどこでも暮らせるとういと感じてハッとすることはありはしないか。いきなり蒸発しかかるような、恐怖の混じることもある。

納豆に戻れば、私と同じ年配で、西のほうから東京に出て来て住みつくことになった知人の多くは、郷里では、あんなもの、喰ったことがなかった、と言う。初めは気味が悪くて手が出なかったが、それが三年もして、東京の生活に揉まれるようになり、食事もとかく半端になりがちの頃、ある夜、ドンブリ飯に納豆をぶちこんでがつと掻きこんでいる自分に気がついて驚いたという。あれは大都市の生活に、関東の荒い空気に、ささくれ立ちがちな神経を宥^{なだ}めるのに、良い喰い物のようだ。

——大坂の人にすれたる冬の月 利合

芭蕉七部集の「炭俵」に見える句であるが、関西で暮らしたことのない私にも、どこぞから浪速^{なにわ}に出て来て何年か暮らした人の心境が、冬の月の情景とともに見えるような気がする。しかし「大坂」を「大江戸」にしたら、どうだろう。「すれたる」に、どうも、色